曹洞俳壇

選・村松五灰子

元旦の薬は午后に飲み始む

福島県　西木　甚

評　一年の計は元旦。朝からの薬では適わない。この日は午后から飲む。滑稽味があり病にも淡々と付き合う姿が見える。

婿殿がそっと呉れたるお年玉

和歌山県　田﨑よし子

評　予想外の我が娘の婿殿の心遣いが嬉しかった。浮き浮き気分が出ていて楽しい年の始まりの予感である。

◆とろとろと炊いて七種一人膳　愛知県　伊藤　律子

◆数へ日や妻と連立つ診療所　長野県　下島　博

◆海鳴りの近き北窓塞ぎけり　佐賀県　池内　淳子

◆波郷忌（はきょうき）や生ある限り句を読まむ　愛媛県　井上　征郎

◆麦刈や五右衛門風呂の母白し　北海道　高橋　哲

◆かくれんぼ子等は干菜の匂ひせり　三重県　米野てるみ

◆手を温め母の脈みる冬の朝　兵庫県　美濃　敏子

◆島の子の二人並んで卒業歌　長崎県　麻生　勝行

◆野仏風雨の傷み冬ざるる　埼玉県　小林　茂之

◆黒々と雨に落ち着く冬田かな　大分県　武石富美子

＊選者吟

ご隠居の花下のお薄や車椅子

五灰子

＊作句小見

一年で一番明るく華やかな大自然。どこへ出かけても春がいっぱいに広がり胸は高鳴るばかり。

近くの水辺も山裾も小花や小鳥のさえずりが。

外に出て深呼吸、脳内リフレッシュです。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

どんぐりは独楽に変身したけれど何も変わらぬ僕の生活

福岡県　三吉　誠

評　何も変わらない自分の生活を良しとしているのか否かは定かではないが、災害にいつ見舞われるか分からぬ現在、幸せなことと思いたい。しかし、誰にでもある変身願望を思えば多少の悔しみも感じられる。その揺れが面白い。

固まった砂糖をゆっくり崩すとき友の言葉の深さを知りぬ

山梨県　北村　富子

評　「ゆっくり」が効いている。友の言葉を噛みしめている時間が感じられるからだ。辛口と思われた言葉が次第に心に沁みてくる状態は、偶然だが砂糖の塊ともよく調和する。

◆異国よりウイルスらしきメール受く返信すまいぞマドモアゼルに

千葉県　冨野光太郎

◆彼岸花咲く時期海苔の胞子付けと夢中になりしも遙かとなれり

愛知県　近藤美代子

◆シャンペンに大吟醸をまぜるも良し昇りゆく泡に希望の湧きぬ

ロサンゼルス　井上　健一

◆居酒屋の暖簾くぐればわが席に種田山頭火座りて居たり

青森県　中田　瑞穂

◆林道に落葉を厚く敷きつめて腰弁当を開く若きら

鳥取県　山本　浩一

◆旧姓を丁寧に書く友もおり施設の書初めほのぼの愛し

兵庫県　前田あつ子

◆和紙で酉切りつつ祈る賀状をば受けとる人の真幸くあれと

熊本県　島田　佳可

◆座るにも立つにも老いの見ゆる妻身は辛かろに畑に出でゆく

福井県　山本　静

◆何となく君に待たるる心地してタイ新しく玄関を出る

東京都　野村　信廣

◆ちょっとした隙間を埋めた小包が母から届くメモといっしょに

奈良県　鈴木　重雄

＊選者詠

誰よりも転びやすくて絵の中のあの坂道が気にかかるなり

ちづ

＊作歌小見

前田さんの作品、旧姓のほうが脳裏に強く刻まれていればこその署名で種々の思いを読者に抱かせます。島田さんの歌は年賀状の本来の役目に立ち返らせる爽やかさがあり、鈴木さんの小包の隙間には母の愛が詰まっていると感動しました。

大本山永平寺

授戒会

早朝の薄暗い中、畳んだお袈裟を両手でいただきながら坐禅堂へ向かっておりますと、涼しい風が背筋を伸ばしてくれます。春風は草花を撫で、山の香りを運んできます。

永平寺には季節を問わず、風に逆らっても香る、「仏の香り」があるといいます。

「仏の香り」とは、「戒」（仏の安らぎの生き方）を行ずる者の清々しい姿のことです。

「戒」を行ずる者は、習うべき仏の灯があるので、いつも迷うことがありません。

雲水が、廊下で通りすがりに履物をスッと揃える姿や、食事の際に「いただきます」の偈文を、手を合わせ一心にお唱えするその指先に、「仏の香り」を観じているものであります。

さて、永平寺では毎年四月二十三日から二十九日まで、「報恩授戒会」を営みます。

「授戒会」とは、正式に仏の子となる式です。十六条の「戒」（仏の安らぎの生き方）をお誓いし、自らの生きる灯とするのです。お釈迦さまも、道元禅師さまも、滅後にパッと仏になったのではありません。生きたそのお姿が、眼差しが、言葉が、まさに安らかであったから、「仏」といわれるのです。

「戒」を授かり、「仏の香り」を身にまとい、二度とない一息一息を安らかに生活修行していきたいものです。

大本山永平寺／０７７６-６３-３１０２

大本山總持寺

報恩大授戒会

四月十日から十六日までの一週間、本年卒寿（九十歳）を迎えられた江川辰三禅師さまが戒師をお勤めになられての、「報恩大授戒会」（お授戒会）が勤められます。曹洞宗には多くの法要や儀式がありますが、中でもお授戒会は僧侶と檀信徒が一体となって七日間の修行を行う最も重要な儀式です。

「信火行煙」という言葉があります。教え（戒）が身につけばそれが生活の上で実行される、ということです。

戒を授かるということは、お釈迦さまの根本の教えをいただくことであり、仏の教えを自らの行いに照らし合わせ実践していくことです。戒を授ける戒師さまは戒弟をよく導こうと勤め、僧侶たちはその舞台を整えようと努力いたします。

そして大勢の戒弟の皆さまは礼拝と聞法・坐禅を行い一週間寝食を共にし、一心に修行に励むのです。この独特な雰囲気は、お釈迦さま在世のころの祇園精舎に通じる尊いものです。

お授戒会はまた「一期一会」の場でもあります。様々な人生を歩んできて、これからも別々に生きていく人々が總持寺に集いお籠りをして生活と修行を共にするのです。

このような素晴らしい「報恩大授戒会」に、お一人でも多くの檀信徒の皆さまが参加されるようお勧めをいたします。

大本山總持寺／０４５－５８１－６０２１